

---

# 気分屋な僕

砂鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気分屋な僕

### 【Zコード】

Z90700

### 【作者名】

砂鈴

### 【あらすじ】

高校生になった主人公。待ち受けているのはどんな日々??

季節は春。

桜の花びらがチラハラと散り始める頃、俺こと沖田忍はウトウト<sup>おきたじのぶ</sup>としていた。今は入学式の最中だというのにだ。

そんな忍君は中性的な顔立ちに女子が羨むほどの中のサラサラとした黒髪の持ち主でした。その姿はため息が吐くほどものだというのに本人はどこ吹く風とゆっくり舟を漕ぎ始めているのです。

忍君が今日から通うことになった学校は歴史の浅い私立高校でした。

さてさて、忍君はどこでこの学校に決めたかといつと家から一番近いという理由でした。（それでも電車を乗つて来なければなりません）

そろそろ主役に登場してもらわないと間が持ちません。ということで主人公視点にしたいと思います。

ん？　ああ、やつと僕の出番ですか。ええ、とりあえず今は起きてますけどこの暖かい春の陽気にいつ負けてもおかしくはありません。そんな状況の僕です。

この学校の入学式はなんだか堅苦しくて暇です。なんか背伸びをして厳格な学校に見せようと見栄を張つているような気がします。かれこれ式が始まつて一時間。そろそろ終わるはずなんですがねえ。

今日はこれで学校は終わりだから帰つて我が妹の手料理を食べなければいけないのだ。妹のジェシファーじゃなくて光の手料理は一級品だよ。あれを楽しみに一日を頑張つているようなものだ。

僕が今日の昼ご飯はなんだろうとあれこれ考えている間に式は終わつたようでは皆より少し遅れて立ち上がり退場する。

僕が今日の任務は終了だな、と思つたと我が家へ帰ろうと思

つているところに女好きの変態が一人近づいて来る。

僕は危険を感じ逸早く体育館を出ようとすると人がごみに溢れかえつていた出口に阻まれた。その間に変態さんに追いつかれてしまった。

「よし、シノブ君ッ」

僕にとつて不幸中の幸いともいうべきことは一つ。この変態さんが機嫌が良いことだつた。これならば案外早く帰れそうだと思つた。

「なあシノブ、ちゃんと紹介してくれよ」

少し罪悪感を感じた僕は渋々頷いた。まあ、いつまでも変態さんではかわいそうだし言い難いとも思つていたのでもう少し良い。この親友面をしている女好きの男は市原誠也。いちばる せいや女好きと言いながら変なところで一途な男である。スポーツが得意で、この高校にもスポーツ推薦で通つたラッキーな奴だと覚えておいてくれれば問題ない。

「こんなもんでいいよね」

僕が爽やかぶつた笑顔でそう問い合わせる。爽やかスマイル、自分でも不細工なんだろうなあと思つ。大体、上手く笑えているかどうかが分からぬ。

「親友の後にいらないものが付いていたのが気に入らない」

少し拗ねてしまったこの男。僕はスタスタと人がいなくなつて空いてきた出口に向かつて歩いて行く。後ろで放置プレイですか、という声は聞こえなかつたことにしておこう。

外は太陽が出ていてまさしく小春日和という天気だつた。式で縮こまつた体を伸ばす。気持ち良いもんだなあ、と思った。

変態の誠也からも開放されたし、あとは我が家で待つている光と昼ご飯のために真っ直ぐ帰ることだ。そう思つて学校を出て行きました。そんな彼を見ている人がいるとも知らずに・・・。

## 2.0・2 不幸な少女はだあれ？

「トト、トトと心地よい揺れが僕を眠りへと誘つ。

混雑する電車の中で運良く座ることができた僕は朝どこかにとまりウトウトとしているのである。

今日からは普通に授業があるのでちょっと楽しみでもあり憂鬱でもある。

ふと目を上げると学生が沢山乗っている。同じ制服もあれば他校の制服を着た生徒もいる。

僕は周りを見回していたがある人物に気付き俯く。気付かれていなければ幸いだがあいつはまだとく見つけるだらつ。

「奇遇だねえ、シノブ。同じ電車だったとはな

まう。ラッキーで受かった誠也君はまたもやラッキーで僕を見つけたようだ。どうして僕はこの時間の電車に乗ってしまったのだらうか。

「今日はついてないな

僕はボソッとそう言つたが誠也には聞こえなかつたようだ。それでもこいつはさつきからニヤニヤと周りを見ている。はっきり言つと気持ち悪い。

「その目を止める。ニヤニヤ笑いも止める。電車で浮かれるとはお前はいくつだ

電車ではしゃいで許される年ではないはずだ。僕がそう思つて言うと誠也は心外だと言わんばかりのジト目で見てきた。なんなんだ？

「お前は何も分かつていね。」いやって電車に乗っている女の子を見て可愛い子を探しているんだよ。実際に有意義な時間の使い方だろ」

自信満々でそう言つてくる誠也。止めてくれッ、僕まで同類に思われてしまう。・・・もつ手遅れなのか？逃げれるものならここから逃げたい。

キョロキョロと相変わらず落ち着かない誠也が何かを見つけたようだつた。

「おい、見てみろ。あの子、惚れるぞ。しかも同じ学校だ。一年かな？」

誠也の視線の先を追うと確かに同じ学校の制服を着た女の子がいた。こいつに惚れられたかわいそうな女の子はどんな子だろうと頭のてっぺんからつま先までをそれとなく見てみる。

そして、分かつたことが彼女は僕とは対照的な位置にいるだろうということだ。意思の強そうな目が僕とは間逆の位置にいることを明確にしている。僕は優柔不断で通つてるから。

僕がそんなことを思つてると誠也が俺が落としてきてやる、と言つて人ごみを搔き分け彼女の方に歩いていつてしまつた。

声は聞こえないので状況だけ説明しておこう。

まず誠也が声を掛ける。彼女が振り返る。明らかに迷惑そうな顔をしている彼女。そんな顔は見ていいかのように誠也は話し掛けれる。彼女は首を横に振つている。

ああ、ダメだな、と思つてると誠也が僕を指差して何か喋つてゐる。彼女がこちらを向き目が合つ。たつぱり見つめ合つこと数分。彼女は顔を赤くして俯いてしまつた。僕には何のことやら分からない。

そこで僕は降りる駅にいることに気付き降りた。電車から一人が降りた気配はない。あの子もかわいそうに誠也なんかに惚れられたために乗り過ごしてしまった。『愁傷様です、と思いながらも僕にはどうすることも出来ないので一人平和に学校に向かって歩き出した。

「あ、今日は良い日かも」

## No.2 不幸な少女はだあれ？（後書き）

主人公の性格が未だに分かりません。（おいっ）こんな作者ですがこれからも宜しくお願ひします。

僕の席は窓際の前から四番目であった。これほどてもいいことである。

そんなことを席に着いてしばらく考えていると教室のドアが勢いよく開いた。何事かと田に向けると乗り過ぎてした馬鹿な誠也だつた。僕は良く間に合つたなあ、と少し感心していた。そんな僕の視線に気付いたようで、僕の席まで近づいてきた。

僕は例の爽やかスマイルで挨拶する。キヤー、という悲鳴も聞こえたのでそれほど酷い顔なのかなあ、と今度鏡で見てみようと思つた。

「よくもシノブは俺を置いていつてくれたなあ」

なんだか笑顔なのに目が笑っていない。こいつはスポーツ推薦で入学するだけのことはあって力は強い。まず腕力では僕に勝ち目はない。

「いやいや、一人が良いムードになつてゐるところを邪魔するのも野暮つてもんだろ」

「この子の好きな女の子の話を聞いておけばまず間違いなく安全だ。案の定、この子は途端に『ハーフ』と話しかけ始めた。

「あの子の名前は『キンローンカーンローン』」

素晴らしいタイミングでチャイムが鳴り、慌てて自分の席に着く誠也。意外に真面目君である。結局名前は聞けなかつたが問題はない。

担任はカッコイイ男性教師でもなく、綺麗な女性教師でもなく、極々普通の男性教師だった。名前は・・・忘了。その内また登場してくれるこことを願おう。

そんなこんなで僕はボーッと校庭を眺めていた。自己紹介なんて面倒くさいことをやり出そうという教師じゃなくて全く良かつた。しかし、委員会は決めなければいけないようで今は委員会決めをやつている。これが中々決まらない。これほど消極的なクラスもあつたもんだ。まあ、僕もその類に漏れず委員会なんて面倒くさいことはやりたくない派だ。

結局最後はありきたりにジャンケンで決めることになった。こうなつたらもうこちらのものである。なんせ僕はジャンケンはめちゃくちゃ強いから。僕は早々と一抜けし委員会はやらなくていいことになった。

そのあとは順調に委員会も決まり、授業も行われた。授業ははつきり言うと暇である。退屈以外の何ものでもないと思つた。サボりたいところを今日は初日ということで仕方なく寝て過ごした。いきなり目をつけられたことは当然である。

昼休み。僕はチャイムと同時に弁当を広げた。光が用意してくれた物である。全く頭が上がらないことだ。

「おッ、美味そうだな。俺にくれッ」

僕の弁当に目をつけた犬・・・寧ろハイエナが近づいてくる。

「こればっかりはやれん。近寄るなハイエナめ」

僕がきつぱり断るとハイエナは僕の前の席のやつの椅子を無理矢

理奪い向かい合ひ形で自分の弁当を食べるハイエナ。自分の弁当あるなら最初からそうしよう。

「お前なあ、最初から寝て、完璧に要注意人物になつてゐるぞ」

「誰よりも早く名前を覚えてもらえたな」

誠也は、お前は、とかなんとか言つてゐるが声が小さすぎて聞こえない。僕が少し壊れたかなあ、と思い始めた頃にやつと復活した。

「そつだッ、朝の話ッ。あの俺と運命の出会いを果たした女の子。彼女は一年A組 御坂 希。俺の見たところ実は天然とみたな」

天然？ 僕にはもつとしつかりしててリーダー的なタイプの人かと思つたけど・・・。人は見かけによらないとか言つしな。僕は自分で見ないと中々信じないタイプだからこいつの言つこと信じてないけど。

「ふーん。で？」

「で、つてなんだよ。そのこんなことが言いたかつたのが、つて言いたそうな目はッ」

事実そつだ。そんなことを知つたところで役に立つとは思えない。

「はあ、まあいい。その子にあんまり迷惑かけんなよ。今日も遅刻しそうだつたら」

「ああ・・・あれはお前が言つてくれなかつたからだろッ」

ヤバイ。朝に忘れさせたことを自分で掘り起しちゃった。墓穴を掘るとまさにこのことだと再確認した。

「まあまあ、今度なんかあつたら気まぐれで助けてやるよ」

「気まぐれなのか？　まあいい、なんかあつたら言ひからな」

そう言つて一いや一いやと気持ち悪く笑つた。もしかして大変なこと言つた？

午後も変わらず退屈な授業を真面目に受けている僕は結構偉いはずだ。

そして、今は今日の学習の時間がちょうど終わった時間である。

「シノブー、お前もバスケ部に入れッ」

「こんなことを言つてくるやつは一人しかいない。誠也だ。誠也はスポーツ推薦で入ったのだ。バスケの。さすがに推薦を受かるだけのことはあって選抜にも選ばれていてそこそこの成績を収めていたはずだ。」

「今、考え中だ」

さて、どうするか。

「何、考えてくれるのか？ 今まで嫌だの一点張りだったのに…」

僕はそんなことに悩んでいるわけではない。

「お前は何を誤解しているんだ。僕はクラブに入るかどうか悩んでるんだ」

中学ではクラブは全くしていなかつた。しかし、今更やるものどうかと思うし、けど何かやっておいても良いような気もする。誠也はそこからツ、とか言つてているが気にならない。

「まあ、気が向いたらクラブを見にきてくれ。ゆっくり決めたら良  
い」

なんか誠也が微妙にいいことを言つてゐる。これはおかしい。雪  
でも降るかもしない。

「なあ、傘持つてきたか?」

用心に越したことはない。今はカラツカラに晴れでいるが悪い予  
感がする。

「いぐら俺でも春に雪を降らせるとは思わないから安心しろ。じ  
やあな

やつ言つて颯爽と立ち去つてしまつた。やけに清々しくて逆に氣  
持ち悪いな。僕はとりあえずどうするかだが、

「図書室へ行こう」

何故か図書室へと向かう僕。意味はない。目的もない。では何故  
行くのか。それはそこに図書室があるからなのかもしない。

図書室はもう田と鼻の先にあるので寄つてみよつと思つただけの  
ことなのだ。

図書室は程よい気温で過ごし易い、快適な空間になつていて。図  
書室には学校の初日ということもあつてなのか普段からなのかは分  
からないが少しの生徒しか利用していなかつた。

僕は本棚の間をゆっくりと歩き、面白そうな本を探していた。次  
の本棚の間を覗くとそこには一番高いところから本を取ろうと奮闘  
している小さい女の子。背伸びする度にその長くて綺麗な蒼髪が搖

れる。僕はスッと出て行き手伝おうかと思つたが出て行くタイミングが分からぬ。

さて、どうしようかと悩んでいると彼女はジャンプし始めた。なんと言つたかその姿は愛らしかった。

僕がしばらく見ている間に彼女は本の背表紙に手をかけ何とか取れそうだった。そして、本が取れたと思つたらそのまま盛大にこけてしまつた。僕は慌てて飛び出す。

「大丈夫だったか？」

そう言つて彼女に手を貸す。彼女は最初ぼんやりと僕を見ていてが僕の手に恐る恐る自分の手を重ねた。僕は彼女の小さい手を掴み、勢いよく引っ張り上げる。

「怪我ない？」

彼女はコクンッと頷いた。小動物を思わせるその仕草が可愛いなあ、と思った。僕は床に落ちたままになつていた本を拾い上げる。それは小さな詩集だつた。

「詩集読むんだね。僕はあんまり読まないから分かんないけど面白い本があつたら教えてね。僕は一年D組、沖田忍。宜しくね」

好感を持たれるように笑顔でそう言つ。第一印象は大事だ。彼女は分かつたと肯定しただけだった。彼女は何者なのでしょうか？

「只者じゃないね、君は。じゃあね」

そう言つて立ち去る僕。あれか？ 彼女は名乗るほどの者じゃ御座いません、というのがやりたかったのかもしれないと常識人なら

考えないことを考えていた。

外へ出るともう夕暮れだったのでクラブ見学は明日からにして  
と思った。入部するかどうかは分からぬけど・・・。

## 20・5 出会ったのは偶然？運命？

僕は今はつきり言つてかなり戸惑つてゐる。その原因は各クラブが新入部員を集めるために勧誘をしているからだ。しかもしつこのなんのつてめちゃくちゃしつこいんだ。

僕はこの勧誘地獄をなんとか抜け残つたのは片手に鞄。もう片方には部活の宣伝用紙。僕はその中の一枚だけを別にして他のゴミ箱へ捨てる。

教室には既に誠也がいてなんだかむかついた。誠也はもうバスケ部に入部することが決定しているからあの勧誘地獄からなんなく抜け出せたのだろう。僕は苦労していたというのに。

僕は自分の窓際の席に座る。それと同時に誠也が前の席に座る。そして、田ざとく僕の手の中にある紙に気がついたようで紙を引っ手繕る。

「お前・・・本気なのか？」

誠也が驚愕という顔を浮かべて僕を見つめてくる。

「これが一番マシっぽいんだよ。それにいつでもサボれそうだしな

僕が目を付けた部活はオセロ部だった。なんと驚く事無かれ部員は三年と二年を合わせて三人だ。しかも一人は幽霊部員という話だ。部活として成り立っていないのだが存在しているのだ。しかも、三人中一人は部活に来ていないのだから残りの一人は部活で一人でオセロをやっていることになるのだろうか。想像すると危ない人のような気がしてならない。

「サボれそっだが……いつか潰れて毎日サボりみたいな状態になりそなのが？」

やはりこの馬鹿でもそう思つか……。僕もはてしなくそのような気がしてならないのだ。

「今日、一回行つてみる」と云ふよ

それつきり僕は昼休みにじ飯を食べるため一度起きただけで他はずつと寝ていたのだった。そして、今日の記憶がないままに全ての授業が終わっていた。

「さて、物理室とは……どこだ？」

オセロ部は物理室で活動しているようだが、まだ学校に通い始めたばかりなのでどこに何があるかなんて分かるわけがない。

このときばかりは自分の強運に感謝した。目の前にはこの前図書室で会つた女の子がいたのだ。後ろ姿だがあの綺麗な蒼髪はあの子以外にまずいないと想い、声を掛ける。

「おーい、そこ行く侍殿！ 少しばかり時間を頂けないか？」

なぜ彼女が侍なのかも、僕の言葉がなぜ古めかしいのかも分からぬ。

「えッ？ さ、侍？」

彼女が慌てふためき左右をキヨロキヨロと見てゐる姿が可愛い。やはり小動物みたいで抱きしめたい衝動に駆られた。

「侍は君だよ」

ナツ声を掛けると、とつとつ僕に気付いたよつだつた。

「わ、私？」

僕の顔を見て更に慌てふためく彼女。やつぱつとつもなく可愛い。惚れちゃうかもね。

「そうそう相だよ。お時間頂けますか、お嬢様？」

膝を着き見上げる形で彼女を見る。彼女はめちゃくちゃ驚いていた。冗談はこのぐらいにしておこう。いい加減彼女が戸惑つてあたふたし始めたから。その姿も可愛くて少し惜しかったけど・・・。

「「「めん」」めん、冗談だよ。ただ道を訊きたかったんだ。物理室がどこにあるか知らない？」

僕がやつと彼女は少し安心したよつだつた。

「やつこうじだつたんだですか。驚いたよ。物理室まで案内しましちよつか？」

案内までさせてしまつて果たして良いのだろつか。彼女は僕が考えている間も「」としつついる。

「じやあお願こじよつかな

彼女の笑顔に僕は負けた。お返しとばかりに僕も笑顔を浮かべる。すると彼女は一度硬直してしまつた。真剣に今度鏡を眺めてみよう、

と思つた僕だつた。

「一、こつひです」

彼女は顔を赤らめながらもさつと歩いて歩き始めた。大丈夫かな。  
熱はないのだろうか？

なぜか無言が続く僕ら。なんでだろ？

「そりいえば僕の名前覚えてる？」「..」

これで忘れました、とか言われたらショックを受けますよ。しかし彼女は勢いよく答えてくれた。

「も、もちろんですよ。沖田君ですよね」

慌てながらも笑顔は崩さず答えてくれる彼女。ん~、天使かも。

「シノブで良いよ。僕たちもう友達でしょう？」

彼女がいつの間に？、つて眼差しを向けてくる。

「僕は最初からそう思つてたんだけど・・・。君は友達になつてくれないの？」

僕は少しシュンつてなりながらそう言つ。すると名も知らぬ彼女はすごい勢いで首を振る。やっぱり可愛い。妹の光と同じように頭をクシヤクシヤツと撫でたくなつた。いつか撫でてやるつと思つた僕だつた。

「ありがとう。ところで僕は君の名前を知らないんだけど・・・」

せうふうと彼女はいきなりしまつた、といつ顔になつた。感情がとても豊かだと思つた。いつまでもこの顔を見ていたいと思つたり。・・。

「すいません。私すっかり自分は名乗つたものだと思つてました。私は榎本蒼美です。なんとも呼んで下さい」

なんとでも、と詰めると困るような気がする。なんたつて僕は優柔不斷で通つてゐから。

「じゃあ氣分で榎本、蒼美、姫を使い分けよ」

さすが僕。あらかじめ逃げ道を用意しておへ方法を取るとは自分でもびっくり。

「姫ですか？」

なるほど。そこに食いついたか。なんとなく姫オーラが出てるような気がするんだよな。

「まあまあ、良いじゃないか。蒼美は部活はするのか？」

「昨日も今日もふらつこころるので気になつたことだ。

「わうなんですよねえ。じつよつかなあ、と黙つてゐるんですよ。はい、物理室ですよ」

少し名残惜しそうに蒼美がそつと立つ。そんな田で見られるとなあ。

「蒼美はもう帰るのか？」

蒼美が少し考えてコクリと頷く。さらに訊くと彼女は電車通学でこれまた同じ方向だつた。

「じゃあ、一人で帰るつ。蒼美のことをもっと知りたいしな。物理室はまた今度だ」

昨日に引き続き今日も会つたのはもはや運命といつに相応しい、といつわけの分からぬ理由を付け、無理矢理帰ることにした。

「蒼美、今日はおかげで楽しかつたよ。またな」

帰り道は一人のことをお互いに話した。蒼美は良くな笑つてくれてとても楽しかつた。電車は僕の降りる駅の方が早かつたので最後にそう言って、電車を降りた。

この時間帯にこの駅で降りたのは僕だけだつた。今日は変態の被害もあまりなく、蒼美と仲良くなれ、とても良い一日だつた。さて、明日も平和でありますように・・・。

雨。それは今日の昼休みから唐突に降り始めた。朝は雲一つない快晴だったというのにだ。

おかげで僕は今日は濡れて帰ることが必須だ。もちろん置き傘なんて気の利いたものはない。

クラスメイト達で行うクラブの奴等は喜んでるし・・・僕とは対象的だ。因みに僕はオセロ部には結局入部しなかった。

・・・今思い出すだけでも身震いしそうになる。部長が一人才セロをしている姿。物理室のドアを開けて目が合つて、瞬間後ずさりして一目散に逃げたのだ。部長はフフフと一人で笑っていたのも悪かったのかもしれない。

僕のトラウマの一つになつたことは言つまでもない。物理室がとてもとてもとても苦手になりました。

雨は降るし、嫌なことは思い出すしで僕は少しブルーな気分になるわけで・・・

「シノブ、お前傘忘れたのか？ 僕もだ」

アハハつと笑いながら近づいてくる奴はいつもどおり空気を読めないわけで・・・鬱だ。

「おいおい、止めろよその嫌そうな顔は」

おやッ？ いくら空気が読めないとは言つてもこのぐらいこなら分かるのか。全くもつて意外だ。

「お前、今かなり失礼なこと考えてないか？」

誠也が気持ち悪い流し目で睨んでくる。実に不快だ。その日と雨が相乗効果をもたらしてくれる。不快度指数が右肩上がりですよ。いかん。テンションがおかしくなつてきている。

「あつ、今廊下をすつごい美人が通つた」

僕がおもむろにそういうと誠也はすごい勢いで教室から飛び出した。

さすが女好き。僕にはそんな行動力ない。そんなに本能に忠実には生きられない。いや、煩惱か？

もちろん美人さんは架空の人物です。鬱陶しい奴がいなくなつてやつと一息つけた昼休み。

眠りについた忍を熱っぽく見つめる多くの視線に忍が気付くことはなかつた。

「・・・う・・・起・・・う・・・起きるー」

がばつと頭を上げてまず目に入つたのは誠也の顔。寝起きにそんな顔見せるな。

それはともかく僕は何時の間に寝ていたのだろうか？ そして何時のために放課後に・・・謎だ。

「放課後になつても起きねえから起こしてやつたんだぞ。恭めよ。  
たたけよ。敬えよ」

仰け反つて偉そつて言ひ誠也。

「わあ～、ありがと」

もぢろん気持ちなど込めずに棒読みで単調に言ひ。鞄を持ち誠也をことじ」とく無視しながら教室を出た。後ろで忍は放置プレイが好きなのか?、という声が聞こえた。こんなシーン前にもあつたような気がしたが思い出せない。まあ、対して大事なことでもないからやつぱり放置。

僕が滑りやすい階段に注意しながら一番下まで降りると、

「わつ」

という短い悲鳴が階段の上から聞こえた。ぼぼ反射的に振り向くと空中に投げ出され落下中の男子生徒。

僕は直で落ちたら骨折はするだろ?なあと思いながらもその男子生徒を受け止めた。僕は相当な衝撃を覚悟していたのだが伝わってきた衝撃は極々軽いものでそっちの方にびっくりしたほどだ。おまけに背も僕の顎ぐらごまで顎を置ぐに一度よきやうな身長だった。

「おいッ、大丈夫か?」

衝撃がこなかつたことに驚いていた様子の男子生徒だが僕と目が合うとボーコと僕の顔を見てきた。この反応も最近どこかであつたような気がする。

「・・・好き・・・」

僕はどこのこんなシーンがあったのかを必死に考えていると男子生徒は一言呟いた。僕は考え事に夢中で聞き逃してしまったのだけだ。

「「めん。聞き逃した。怪我はないんだな？」

綺麗な蒼髪の生徒が今度はコクリと頷いた。この仕草もどこかで・・・まあ、考えるのは後でも出来る。そう算段をつけ小さい男子生徒に手をやる。

「爾の口は滑りやすいんだから気をつけないとダメだわ〜。まあ、怪我が無くてなによりだよ」

そこまで言つて僕はまだ男子生徒を自分の腕の中に入れていることに気が付いた。僕が手を放すと男子生徒は小さくアッと言つた。

「どうした？ もしかして怪我してたか？」

心配してそう聞くと何でもないッと言つた。

「助けてくれてありがとう。僕、榎本蒼華えのもとあさかっていうんだ。君は沖田忍君でしょ」

榎本という名字に一人心当たりがあるのだが・・・それに蒼髪も仕草も身長も名前に蒼が入っていることも・・・親戚？ それに僕の名前をフルネームで知つてゐるし。

「ええと、蒼華で良い？」  
「僕も忍でいいからさ」

そう言つと蒼華は嬉しそうに笑つてくれた。

「そうだ。シノブ、少し屈んで？」

そんな笑顔で言われて逆らえる奴がこの世にいるだろ？ が。僕は蒼美との関係を聞くことなんか忘れて屈んだ。

卷之三

ん？　ン？　この子は今何を。顔に熱が集まるのが分かる。  
蒼華は工へへゝと眩い笑顔をしてるし・・・僕にどうしろとツ。僕が戸惑つていると蒼華は少し僕から離れてこちらを向き、

「また明日ね、シノブ」

そう言つて手を振る蒼華に僕は黙つて手を振るしかなかつた。  
・そりやあ啞然と・・・。

## 20・7 小悪魔でしたか・・・

馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な。

僕は今日も遅刻することなく学校に着き。教室の扉を開けた。うんづん。ここまではいつもの日常だった。

扉を開け、一歩踏み出したところで目の前に現れたのは榎本蒼華。百歩譲つてたまたまだとしよう。しかし、

『エコジ』

これはたまたまじやない。キス魔か。蒼華はキス魔なのか？ 教室が悲鳴に包まれるのにそう時間はからなかつた。それはそうだ。蒼華が例えキス魔だとしても蒼華は間違いなく良い男の部類に入るのだから。

「おはよー、シノブ」

純度100%の笑みを浮かべて挨拶してくる蒼華。僕は少し疲れたりつにああ、と答えただけにとどめておいた。

いまだざわめく教室の中を歩き自分の席に着く。そして、当然とばかりに僕の足の上に座る蒼華。

「お前、軽いな。ちやんと」飯食べてるか？」

僕の足の上で窓いでいる蒼華にそう聞く。

「食べてるよお」

語尾にハートマークがつきやつた勢いでそう答える蒼華。

「そのわりには背も小さいし細いよなあ」

腕なんか力を入れられたら折れてしまいそうなほどだ。お兄さん心配……」めん、弟がいたらこんな感じなのかなあと。光も細いしね。まあ、大体女の子は細いけど。

「まだ成長するの」

そう言つてブクウツと頬を膨らませる蒼華。蒼美とダブつて仕方が無いのだが……頭をくしゃつとしたくなる。

「けど、蒼華はこのままでもいいかもな」

蒼華が何でつと言つたそな顔を向ける。

「抱きやすいから」

そう言つてにこりと笑つ忍に蒼華はもちろん、それとなく聞き耳を立てていたクラスメイト達は思わず顔を赤くした。

僕は急に硬直した蒼華の前で手をブラブラ。そうしてみると蒼華が我に戻つたのが分かつた。

「どうした蒼華、考え方か」

蒼華は曖昧に頷いただけだった。

「そうだ。蒼華携帯持つてる?」

そう聞く僕に蒼華はうんと頷いた。

「じゃあ、電話番号とか教えてよ」

その途端教室中が静かになつたのが分かつた。

「どうしたの？ 皆？」

「（咄）シノップの電話番号とかが知りたいんだ（咄）・・・」

蒼華は教室が固まつたことなどお構いなしに首をかしげてゐる僕から携帯を奪つて赤外線を当ててた。蒼華はこの空気が分からんどううか？ まさか誠也と同じ部類なのか？ とか勝手な考えを巡らせていた忍であつた。

「せういえばさあ、蒼華つて蒼美つて知つてる？」

不意に頭をよぎつた質問をしてみる。ずっと聞けなかつたから良い機会だ。

「えつ、蒼美と僕は双子なんだよ。知らなかつた？」

そう言つてコテンと首をかしげる蒼華。はい。知りませんでしたとも。けど双子なら髪の色とか仕草とかが似てもおかしくはない。身長は別かな？

「せうだつたのか？ といつよつやつぱりか

『キーンゴーンカーンゴーン』

つむ。すばらしくタイミングだ。まるでビンカでこの様子を見

ていたよ」。

「ほり、チャイムも鳴ったし教室に帰らないと

そう僕が言つと蒼華はきょとんとした顔をした。何言つての？みたいな

「何言つての？ 同じクラスだよ。しかもこの席の前の前

同じクラスなだけでも驚いたのに、僕の席の前の前だと。榎本・えのもと。沖田・・・おきた。えとおだ。ありえなくはない。知らなかつた。

「いや、さういえばビビが会つたような気がしてたんだよ

アハハッと干からびた笑いをする。

「バレバレだよ。気付いてなかつたんだね」

そう言つて瞳を潤ませる蒼華。えつ？ これは僕が全面的に悪いよな。絶対に。

「すまん。何でもするからや、泣くのだけは止めてよ。僕まで悲しくなつちゃうからさ」

客観的に聞けば口説いていふ間に聞こえなくもないセリフを軽々言つてのける忍。本人はただ必死なだけなのだが。

しかし、蒼華に何でもするとは願つても叶つたりだつたのですぐに笑顔を取り戻した。

「何でもだね」

僕はその言葉にウツと詰まるが諦めて「あ」と言った。なんか失敗した気がするのは僕だけなのだろうか。僕が肯定の言葉を発したことによると、蒼華は純粋に可愛いと思つた。

「で、願いとは？」

僕はなるべく楽なのがいいと思いながら聞いた。あと金銭的なものも止めておいて欲しい。

「ん~、考えとくよ」

そう言つて自分の席に座る蒼華。このドキドキ感をいつまで味わえといつのでしようか。蒼華サンシ。

その日一日ドキドキしながら待つていた忍だつたが蒼華はじつくり考えると言つてクラブに行きました。

「生きた心地がしないんですけど・・・

いつ何時、無理難題を言われるかと思つと心が休まらない忍でした。

「蒼華・・・切実に・・・迅速に・・・決めるか忘れて下さ

い」

思わず心の声が出てこると忍自信は気付いていない。・・・

滑稽・・・?

## No.7 小悪魔でしたか・・・（後書き）

何故か路線が変わつてしまつていてるので次では必死に戻したいと思います。

個人的には蒼華君は好きですよ。

では、また。

20.8 濃い日曜日（前書き）

今日は短くなってしまいました。・・・それだけかな?  
よし。  
訊くな

僕は待ちに待つた休日をのんびりまつたりゆつくりと寝てそこそく計画していたのに・・・、愛しの妹君がお友達をたくさん家に招待したようで階下がうるさいです。

僕はのつそりと起き上がりて服を着替えた。ズボンも上着も僕のサイズより大きいものを着ている。なぜかというと僕はゆつたりとしている方が好きだからだ。しかし、反省もしている。上着から手が出ないのだ。これはさすがに失敗したなあと思つたけどこれはこれで面白いので放置してある。

そして、僕は朝食というよりは昼食を食べるために台所に向かった。光達はなぜ光の部屋で遊ばないのかなあ、と思いながら食材を確認。

「光達はどうすんだろ・・・」

ふと思つた疑問である。僕は料理は作れないことはないが光の方が得意なので光達が家でなにか食べるなら一緒に作つてもらおうと考えたのだ。

「光、お前昼飯はどうするんだ・・・」

何も考えずにドアを開けてそつ聞くと妹達は出かける準備完了だという感じで立ち上がつていた。固まる光達・・・なぜ?

「お、お兄ちゃん。私たちこれから外で食べよつて言つたところなんだよね。ねえ」

悶々と考えていると光が慌て氣味にそつとつて皆に問うた。

「「「」」

そう言つて光の友達一人は首を横に振つた。意見が合致していないのですが・・・。

「えつ。何言つてゐる二人とも」

光の慌て氣味が大きくなつたように感じながら僕は傍観者になつてゐる。

「いやあ、急に光の手料理が食べたくなつてさあ

「そうそう、お金もかかるじゃない」

そう言つてソファに座るお友達一人。視線は僕に向けられてますけど。

光はもう諦め氣味。その内良いことがあるさ光。

「あのさ一人は光の友達だよね。僕は光の兄で忍しのぶつていうんだ。光変なところでおっちょこちょいだからさ心配なんだよねえ。迷惑かけてない?」

光の頭をポンポンと叩きながら聞く。うん、光の髪は今日もサラサラだと思いながら。

「いえいえいえ、慣れてますから」

そう笑いながら言ったのは活潑そうな女の子。光はそんなことな

い、と怒っていたけど。

「やうですね。光のおつちよこちよいは面白いですよ」

これまた何か思い出しながら言つたのか笑つてゐる少女。この娘もまた活潑そうだ。光は友達一人にそう言われて少し恥ずかしそうにしていた。

「まあ、相変わらずといつことだな。ところで一人は？」

「光と同じクラスの香芝湊です。湊つて呼んでください」

「私も同じクラスの矢形菜穂です。菜穂でいいですよ」

フレンドリーな一人らしいことが分かつた。

「じゅうじや宜しく、湊に菜穂」

笑つて挨拶をしたのだが空気が・・・時間が止まったのが分かつた。物音一つ立たないこの空間。じつにうつて最後に何か言った人が大抵原因なんだよな。

「いや、その・・・宜しくしたくなかった」「宜しくお願ひします」「んだ・・・宜しく」

この二人なんだかんだで息ぴったりな気がする。ところですっかり忘れ去られた昼ご飯は？

「やうだ。お兄さんも遊びましょ」

「光は昼ご飯宜しくねえ」

そう言つて僕は着席、光は退出させられた。沖田兄妹なんだか二人に振り回されます。結局一人は夕ご飯まで食べていつてそれから渋々と帰つていきました。なぜ渋々なのかは分からなかつたけど・・。

軽く説明しておくとあの後昼ご飯までは一人と談笑。それからは四人でトランプなど・・・王様ゲームはきつかつただけは言つておこう。そして四人で夕ご飯の買い物に行って、仲良くクッキングタイム。菜穂ちゃんは料理は上手だつたけど湊ちゃんは・・・壊滅的デシタ。これだけは言つておこう・・・パワフリヤな一人の相手はとても疲れた・・・平日よりも疲れた日曜日デシタ。

## No.9 小悪魔再来です（前書き）

更新すつとできませんでした。  
これからはなるべく間を空けなによつに頑張りたいです。  
切れない不甲斐無や。

言ひ

## No.9 小悪魔再來です

体育館。ダムダムとボールをドリブルする音とシューズがキュッキュッと立てる音が体育館を支配する。そつ、今は体育館でバスケットをしているのだ。

「コートは一面で男子と女子に分かれてしまっている。

そんな中、僕はコートをポテポテと歩き回る。僕のいるチームはバスケの推薦で来たラツキー野郎誠也がいるのではつきり言って余裕なのだ。

相手チームはすごい汗だくになりながら走り回っているが僕は汗つかいでいない。

「シノブツ」

誠也が面倒くさいことに僕にバスしてきた。僕はバスを貰つてすぐシートする。綺麗な弧を描いたボールはリングに当たることなく入つた。相手チームがショックを受けてる。

「バスケは割と得意なんだよね」

そうニヤリとしながら言ひ。絶望を感じている相手チームには悪いとは思つたけどね。そう思つてると後ろから衝撃がきた。何とか倒れることなく踏ん張れた僕は振り向くとそれは蒼華だった。

「かつこよかつたよお」

満面の笑みでそう言ひ蒼華。花が咲いたよつなどはこいつこいつとを言つんだと分かつた気がした。

「やっぱシノブ、バスケ部に入れよ

誠也がそう言つ。僕にはそんな考え方頭がない。

「違うよ、誠也君。シノブは美術部に入るんだよ

いやいやいや、断じてそれも違うぞ蒼華。因みに蒼華と誠也は地味にお友達だつたりする。何でも蒼華の前の席が誠也だそうだ。そう考えると僕たちって番号近いな。

「僕は万年帰宅部だ

僕は高校生活を部活でエンジョイするつもりはない。別に部活をやつてる奴を批難しているわけではないから安心してくれ。二人は声を揃えて異を唱えるが僕には聞こえないよ。

「シノブ、美術部に入つてよ。僕以外は皆女の子ばかりなんだもん」

その女の子達の中には蒼華目当てで入つた子もいるんだろうなあ、と思う。そもそも僕に美的センスなんてない。

「絵は下手なんだ

そう言つと蒼華はにこっと笑つた。

「大丈夫。僕が手取り足取り教えてあげるよ。下手なら上手くなれば良いんだし」

手取り足取りに妙な感じを受けたのは僕だけだろうか？ 周りを

見て僕と田中が合いつとあからざるに田中をそらされた。

「じゃあ、この前のお願い使うね。とりあえず今日美術部に行つて  
そ、見学しよう。決めるのはそれからでも良いでしょ」

蒼華・・・覚えていたのか。僕はてっきりもう忘れたものだと思  
つていたのだが。自分で約束を破るわけにもいかないし、とりあえ  
ず見学だけで良いみたいだから行くしかないよなあ。蒼華も願いで  
入部させることはせずとりあえずは見学と気遣つてくれてるし。

「仕方ないな」

そう言ひと今まで心配そうに僕を見ていた蒼華が嬉しそうに微笑  
んだ。抱きつくというオプション付きだが。

するすると腕を蒼華に掴まれ・・・いや捕まれか？ とりあえず  
蒼華に連行中の僕です。それというのも僕がすっかり約束を忘れ去  
り帰りそうになつたから。確かに僕が悪かつたね。

蒼華が美術室のドアを開け僕の中に引き込む。

「新入部員候補を拉て・・・連れてきましたー」

大きな声でそう言う蒼華。今絶対拉致つて言つたよね。自分で言つちやうんだ。それに一応候補だけど見学つて言つて欲しかったな。ともかく蒼華の声で僕に向けられた視線を感じるのです。そして近づいて来る人は恐らく先輩。

「よつこりや。私は部長の咲鞍蝶さくあんちょうと言います。因みに一年生です。今三年生はいないので」

という咲鞍先輩。てことは美術部は一年生と二年生しかいないことになる。大変だ。因みに咲鞍先輩は多分おしとやかタイプだと思われる。

「えー、見学にきました沖田忍です。宜しくお願ひします」

スマイルは無料で。後、見学の部分は強調して。

「部活動と言つても美術室で絵を描いたり、写生をするぐらいですから気軽で良いんですよ。それに部員が増えることは良いことですから入部をお待ちにしています」

そう言つて立ち去る咲鞍先輩。なんていうか教養ありそつ。

「僕が描いた絵見せてあげるよ」

そう言つてぐいぐい引っ張る蒼華。そしてどこからか取り出したスケッチブック。少し恥ずかしそうにしている。確かに自分の描いた絵を人に見せるのは恥ずかしいよな。僕とかは下手だから尚更無理だ。僕は受け取つてパラパラーと見てみる。

「空だな」

蒼華が見せてきたスケッチブックには空の絵ばかりが描かれていたのだ。それは青々とした空だったり、白い雲に覆われた空だったり、夕焼けだったり、

「温かいな」

蒼華はドキドキ顔をどうこうこと、つていつ田をさせながら見ている。僕にもどうこうとかは分からないうが出てきた言葉は温かいだった。

「僕も分からぬけどさ、蒼華の絵を見てたら温かい気持ちになつたんだ。僕は好きだよ、蒼華の絵。素人がこんなこと言つていいかは分かんないけどね」

僕がそう言つと蒼華は破顔させた。安心したような嬉しそうな顔。蒼美と一緒に表情豊かだ。

「ありがと。やつぱり僕、シノブが好きかもしれない」

そう言つて顔を赤らめる蒼華。

「僕は好きだけど」

蒼華とは会つてまだ少ししか経つてないけど誠也よりは好きだ。これは間違いない。

「（シノブのは友達としてなんだろうなあ。そういうの鈍そうだし・・でも）僕も好きだよ（今はこれで満足）」

なんだか急に蒼華が「一コ一コ」始めた。笑つてた方が良いのは確かだけど。

「そうだ。部を案内しないと」

そう言つて僕からスケッチブックを引っ手繩つた蒼華。そういうば、

「なあ蒼華、部員今何人ぐらいいるんだ」

「三年生はいないことは分かつてるけど、一二年生は?」という疑問である。

「一年生は僕をいれて二人、二年生は三人だよ。今のところ何とか五人はいる状況だね」

てつきり蒼華目当ての女の子とかが多そうだと思ってたのに意外だった。少数なんですね。

「どんな人たちなの?」

素朴な質問だったのだが蒼華は答え難そうだった。

「もう一人の一年生は御坂さんっていう女の子で良い人だよ。二年生は部長は分かるよね。残りの一人はなんと言うか夫婦?」

いやいやいや、聞かれても困るんですが。しかも夫婦。結婚は出来ない年齢だし。許婚とかか。

「説明し辛いんだよね。まあいちゃいちゃして的一人組みつて覚えておいてくれれば良いよ」

苦笑しながらそう言つ蒼華。個性的な人たちの集まりと思つておけばいいだろ？

「御坂さんって聞いたことないな」

僕がボソッと呟いた言葉に蒼華は大げさに反応した。まさかまた同じクラスだつたとか。一回目はさすがにまづいなあと思つてゐる

と、  
「シノブ知らないの？ 御坂さんを知らない人がいたとは・・・そつちの方が珍しいっていつかありえないよ」

蒼華にありえないって言われてしまつた。そんなに有名なのか。時代遅れの人間だと呟つのか。

「それは避けたい。蒼華、その御坂さんって人にあつてお」

僕の言葉にハテナマークをとばしながらも案内してくれた。着いたのは屋上。御坂さんは大体屋上で絵を描いているらしい。放課後という時間に屋上にいる生徒は一人だけですぐにあれが御坂さんだと分かつた。

「希ちゃん」

蒼華がそう叫ぶと僕たちに背を向けて手を動かしていた御坂さんは振り向いた。そして、僕はその顔に見覚えがあつた。

「ああー。誠也にナンパされてたかわいそうな人じゃないか」

「いつもや電車の中で誠也がナンパしていた人だった。僕がそう言うと蒼華はそうなの?って顔で御坂さんを見るし、御坂さんは何のことか分かっていない様子。

「こっかさ、電車の中でナンパされて乗り過ごしてたでしょ」

「そこまで言つと合点があつたのかああ、と手をパンツと合わせながらそうでした、と言つた。

「あの時は大変だったんですよ。何とか学校には間に合つたから良かったんですけど、あれだけ必死に走つたのは久しぶりでした。おかげで良い運動になりました」

「こっと笑いながら言つ御坂さん。最後のは怒るとこりだと思うのは僕だけなのだろうか。そう思つて蒼華を見ると苦笑氣味。なるほど、確かに良い人だ。

「とこりあなたは?」

「うん。やっぱり少しづれてる氣がする。普通は一番に聞くとこりだと思つ。」

「僕は沖田忍です。美術部の見学です」

「そう言つてこっとこり笑うと御坂さんはピシッと固まつた。僕が笑うと必ず何かが起こるのは何の因果なんだろう。帰つたら光に聞いてみよ。」

「 そうですか。美術部に入ってくれるんですね。私は御坂希みさかのぞみとい  
ます。宜しくお願ひしますね」

なんだろ？ 美術部に入ることが決定しているよ？ な物言には。

「 一応見学なんだけど・・・」

そう言つと蒼華が少し笑つたような気がした。御坂さんは納得顔。

「 美術部の部長は氣に入った人しか入部も見学もさせてくれないん  
ですよ。因みに部長の中では見学＝入部の方程式が完成してますか  
ら」

そう言つと、一瞬、口を閉じている御坂さん。

「 逃れる方法は？」

僅かな望みをかけてそう問うと、

「 ありません」

きつぱりと言い切られました。蒼華・・・やつぱり君は小悪魔だ  
つたんですね。

僕たちが屋上から帰ると美術室には部長がいて、すぐさま入部届  
を書かされたのはいうまでもありません。部長はおしどやかタイプ  
ではありませんでした・・・騙された。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9070c/>

---

気分屋な僕

2011年1月9日03時30分発行